

演題 59

**防長の医家 四熊家および
浅山家の旧蔵書資料について**

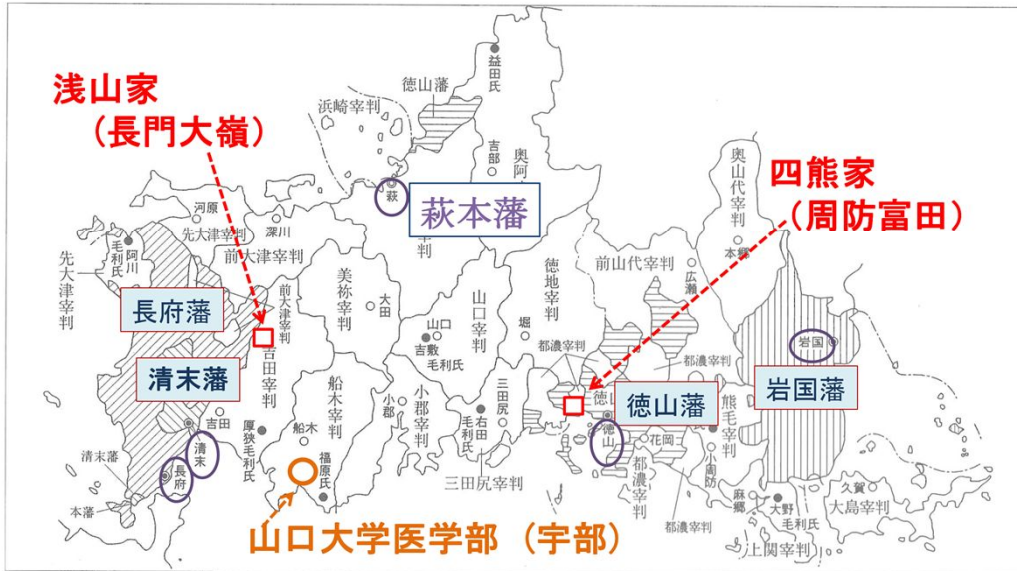
○中澤 淳¹， 亀田 一邦²

山口大学¹， 九州国際大学²

(第114回日本医史学会・第41回日本歯科医史学会)

山口大学医学部図書館には、四熊家と浅山家の旧蔵書がありますが、この中の医学教育に関連するものに焦点を当てて紹介します。

萩藩十八宰判および四支藩



石川辰美「防長歴史用語辞典」より

幕末の時点で長州藩には、萩藩に加えて長府藩、清末藩、徳山藩、岩国藩と4つ支藩があり、萩藩は18の「宰判」という行政区に分けられていました。

四熊家は徳山藩内の周防富田で、浅山家は萩藩吉田宰判の長門大嶺で医業を営んでいました。

ちなみに山口大学医学部がある宇部は当時の周防と長門の国境に位置しています。

[出典] 石川辰美. 防長歴史用語辞典. マツノ書店. 徳山, 1986.

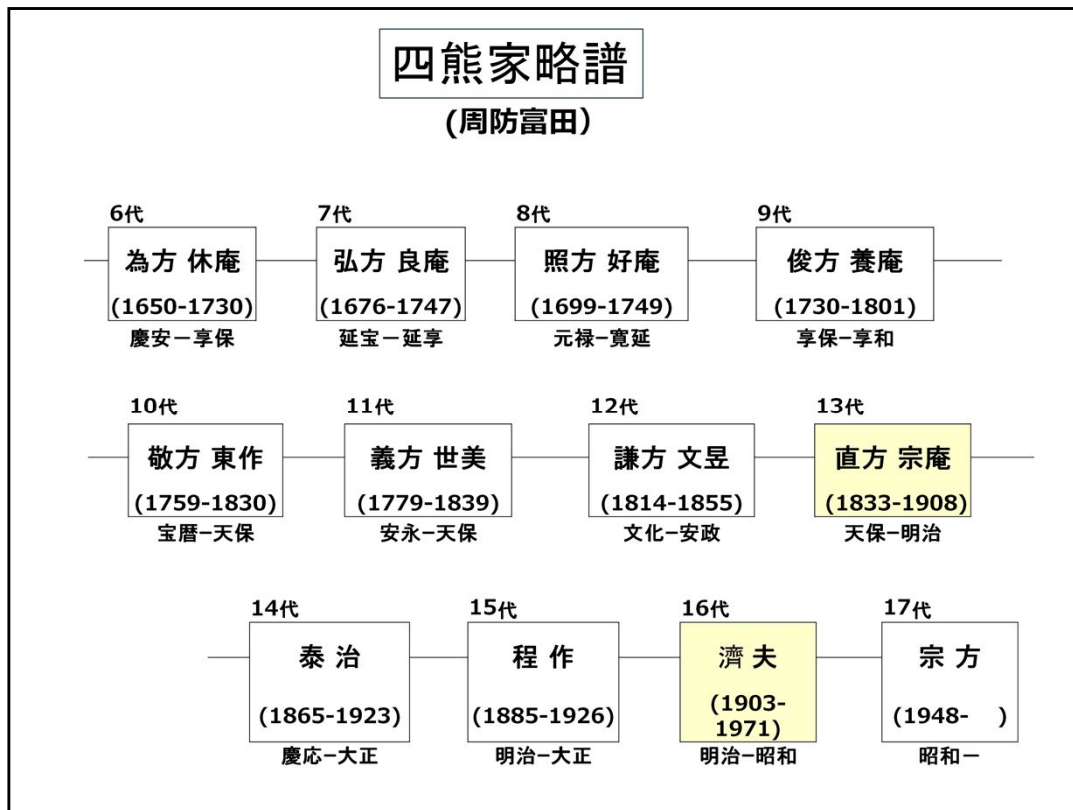


周防富田土井 四熊家 (2013.3.28.撮影)

写真は現在の四熊家屋敷です。

四熊家は16世紀中頃から続く旧家で、18世紀中頃に四熊俊方が長崎で阿蘭陀外科を修得し、地元「見学堂」という名の私塾を開校しました。

藁屋根のところは母屋で、長屋門の左側の部分が教室になっていたとのこと。



これは四熊家の系譜です。

6代為方休庵から医業が始まり、9代俊方養庵から12代謙方(かねかた)文昱までが見学堂の経営に当たっています。

幕末の13代直方宗庵からさらに明治、大正、昭和と医業が続き、16代濟夫(ますお)博士のとき山口県立医科大学へ医学書が寄贈されました。

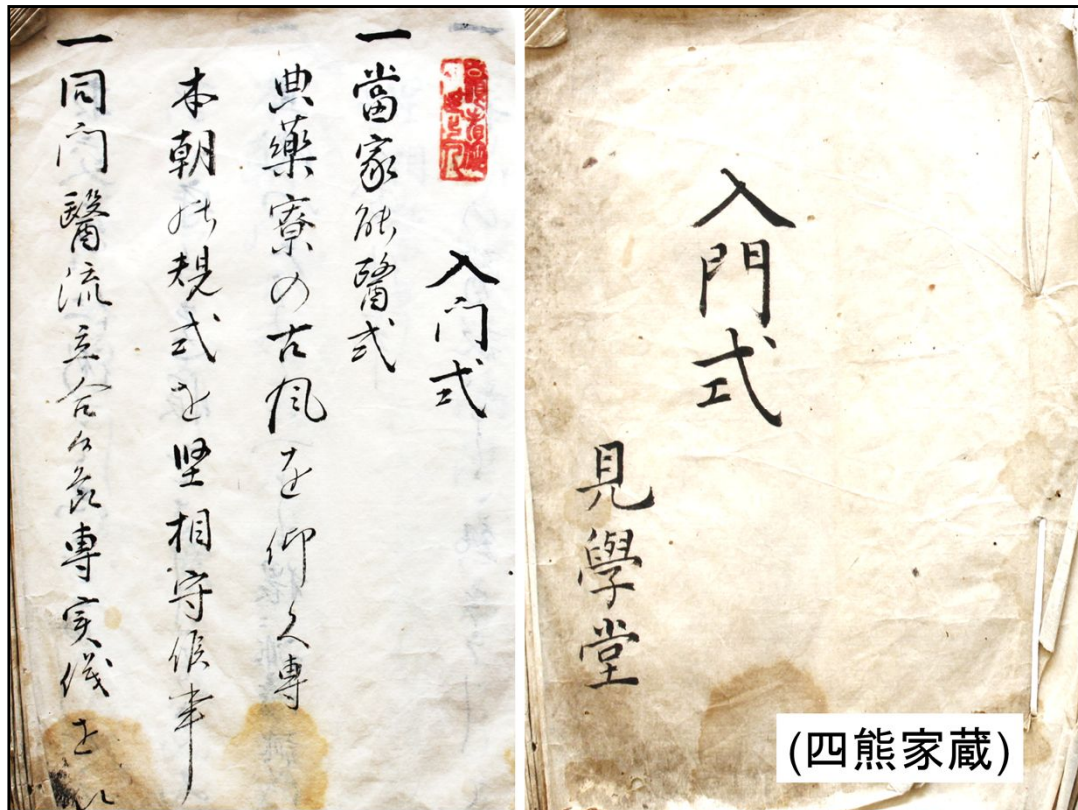
四熊家医書

(70点 278冊 すべて刊本)

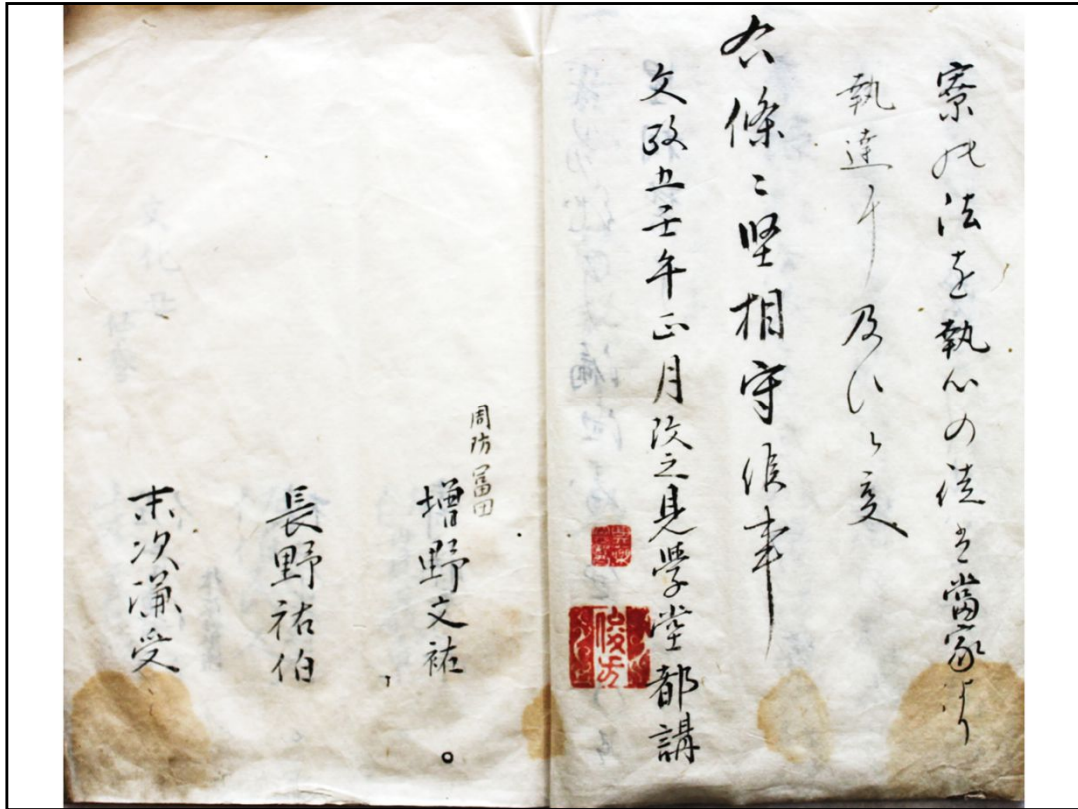
- 1 漢方医学古典および注釈書(12点, 72冊)
「黄帝内経素問」「黄帝内経霊枢」「難経本義」
「傷寒論」「金匱要略」ほか
- 2 金元・明清の医学(13点, 45冊)
「儒門事親」「十四経發揮」「医学入門」「万病回春」
「温疫論」「痧脹玉衡書」ほか
- 3 江戸時代中・後期の医学(26点, 68冊)
「薬微統編」「類聚方集覧」「腹症奇覧」「産翼論」
「名家灸選」「導水鎖言」「医林蒙求」ほか
- 4 西洋医学および翻訳書(19点, 93冊)
「医範提綱」「重訂解体新書」「病学通論」「全体新論」
「七新薬」「斯篤魯黙児砲痕論」「袖珍方叢」ほか

四熊家の医書は70点278冊あり、すべて刊本です。

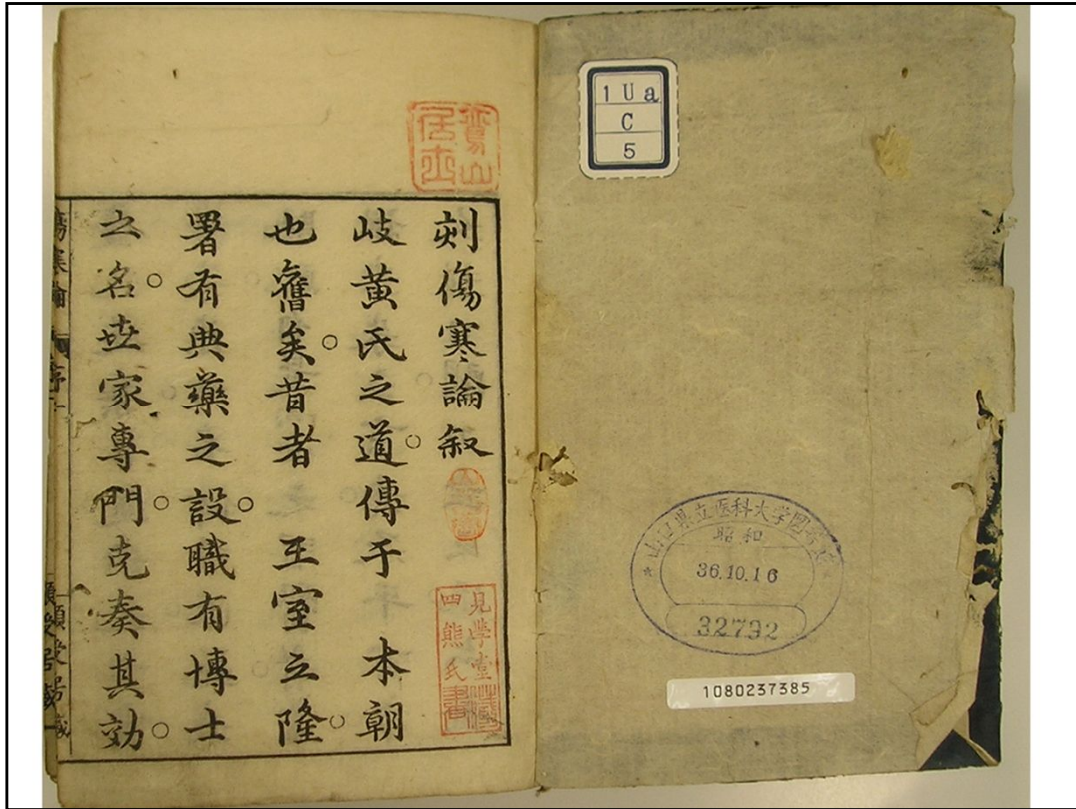
漢方医学古典、金元・明代医学の書物があり、さらに江戸時代中・後期の古方派、折衷派医書、また西洋医学および翻訳書などがあります。



ここに示す「入門式」というのは四熊家私塾・見学堂の規則を示したものです。



この「入門式」が記されたのは文政5年(1822)のことですが、これより嘉永4年(1851)までに見学堂で学んだ門人62名の名前が記されています。これによると防長二州以外の九州、四国、京都からも若者が集まっていたようです。



これは四熊家医書の中にある「傷寒論」の見開きですが、下に「見学堂四熊氏蔵書」の印が押してあります。

上方の印「鸞山居士」は11代の義方世美のことです。

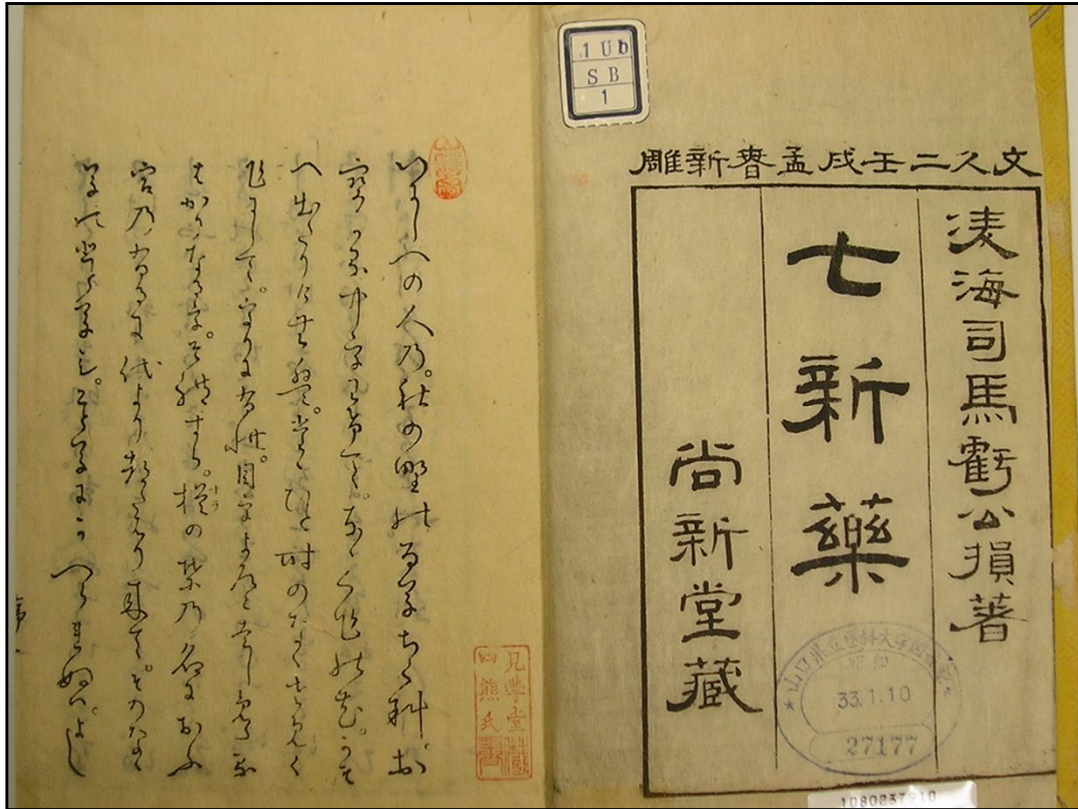
四熊宗庵



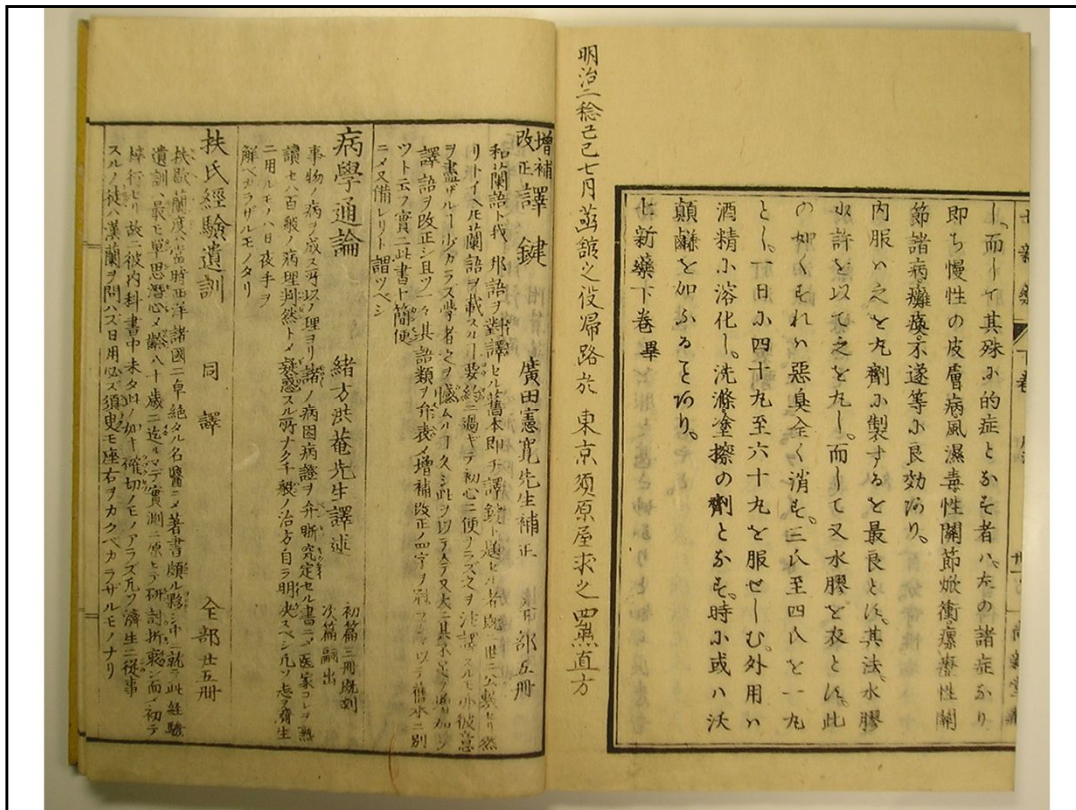
(四熊家蔵)

- 天保4(1833)年 誕生
- 嘉永4(1851)年 大坂に遊学
- 安政4(1857)年 富田村土井にて
内科・外科医開業
- 慶応3(1867)年 徳山藩医となり
第3病院総管
- 明治元(1868)年 蝦夷地戦争に従軍
- 明治2(1869)年 青森大病院に残り
医療活動
- 明治6(1873)年 山口医院で
医術考試受験
- 明治11(1878)年 山口県開業医
証書受領
- 明治17(1884)年 内務省より内外科
医術開業免状下付
- 明治41(1908)年 逝去

この写真は13代直方宗庵です。この人は大坂で学んだのち地元で開業していましたが、戊辰の役・函館戦争では徳山藩医として従軍しています。これはその出陣の時に撮ったものだということです。



これは司馬凌海の著した「七新薬」です。
「見学堂四熊氏蔵書」の角印が押してあります。



而して其殊ふの症とある者ハ左の諸症あり
 即ち慢性の皮膚病風濕毒性關節炎瘰癧性關節
 節諸病癰瘰不遂等ハ良効あり。
 内服ハ之と九劑ヲ製するを最良とシ其法ハ水膠
 水許を以て之と九し。而して又水膠と衣とハ此
 の如く其れハ惡臭全く消去。三ハ至四ハと一丸
 とし。一日ハ四十九至六十九と服せしむ。外用ハ
 酒精ハ溶化し。洗滌塗擦の劑とあり。時ハ或ハ沃
 顛蘇と加ふるあり。
 七新藥下卷畢

明治二年己巳七月函館の役の帰路、東京須原屋に於てこれを求む四熊直方

増補譯 鍵

横田憲寛先生補正 五部五冊

病學通論

緒方洪菴先生譯述 初篇三冊 既刊

扶氏經驗遺訓

同譯 全部五冊

扶氏經驗遺訓ハ當時西洋諸國ニ卓絶シテ名醫ニ著書頗ルシ中此經驗
 遺訓ハ最モ深思熟慮ノ餘ハ十歳ニ達セバテ實訓ニ原トシテ研削折衷シ而シテ初テ
 梓行セリ故ニ彼内科書中未タ加ヘテ徹切トモナラズ凡ソ濟生ニ係ル
 スルノ彼ハ漢蘭ヲ問ハス日用ハス須臾モ座ヲカクベカラザルモノナリ

興味深いことは、この本の最後のところに、「明治二年己巳(つちのとみ)七月函館の役の帰路、東京須原屋においてこれを求む四熊直方」と書き込みがあることです。

このとき東京で購入して持ち帰ったと思われる医学書が他にも数点あります。

長門美祢 四郎ヶ原宿



（「長州維新の道 赤間関街道 中道筋」遠藤薫編、2010）

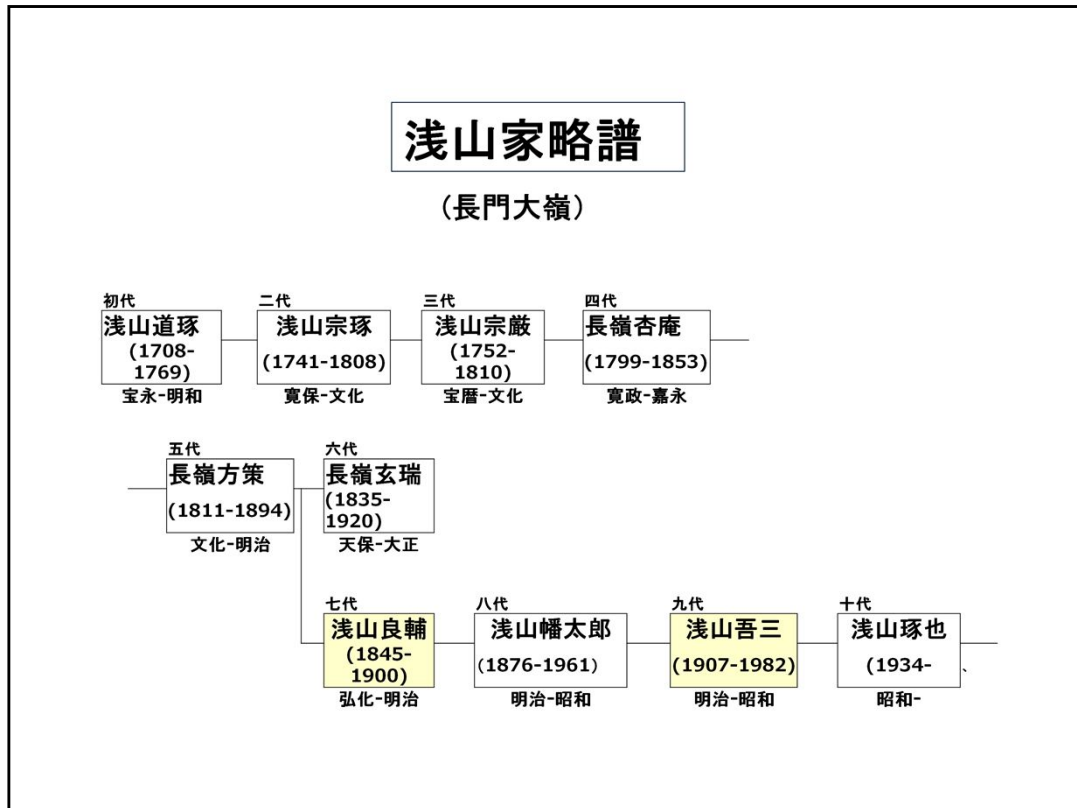
次に浅山家のことを紹介します。

萩と下関を結ぶ赤間関街道中道筋は約80 kmありますが、その中間に四郎ヶ原という宿場があります。

この写真に記念碑が見えますが、ここには吉田松陰が長崎遊学の時泊まったということが書かれています。

このさらに前方右側で街道に面したところに浅山家があります。

〔出典〕遠藤薫編. 長州維新の道(上巻)赤間関街道 中道筋. 図書出版のぶ工房. 福岡, 2010.



浅山家はもと長府藩に仕えていましたが18世紀初めころに故あって藩を退き、浅山道琢が医業をはじめました。

その後途中で長嶺姓を名乗るときもありましたが、医家がつながり6代長嶺玄瑞は幕末に攘夷戦争のとき下関に設置された奇兵隊病院に勤めていました。

また7代浅山良輔は赤間関医学校において医学教育に参画しています。

昭和39(1964)年に浅山家9代の浅山吾三博士が山口県立医科大学へ蔵書を寄贈されました。

浅山家医書

(118点 427冊 刊本62 写本56)

- 1 漢方医学古典および注釈書(9点, 21冊)
「黄帝内経素問」「黄帝内経霊枢」「傷寒論」ほか
- 2 金元・明清の医学(10点, 58冊)
「格致餘論」「万病回春」「医方集解」ほか
- 3 江戸中・後期の医学(47点, 84冊)
「類聚方」「漫遊雜記」「導水鎖言」「観聚方」
「治痘略明鑑」「瘍科鎖言」「産論」ほか
- 4 西洋医学および翻訳書(52点, 264冊)
「講筵筆記」「健全学」「病学通論」
「内科簡明」「診法要覧」「理礼氏薬物学」
「化学入門」「登高自卑」「気海観瀾広義」ほか

浅山家蔵書は118点427冊あり、刊本と写本が半々くらいです。

漢方医学古典や金元・明清の医学書は四熊家蔵書とほぼ同様ですが、江戸中・後期の医書として古方派・折衷派・考証医学の書物や痘科、外科、産科の本などが見受けられます。

さらに西洋医学の書物のなかには解剖生理、病理、内科、診断学、薬物学の本、化学、物理学の翻訳書などの、明治初期に医学教育の教科書として使われたと思われるものもあります。

赤間関医学所



(後列中央石井信一:前列右浅山良輔
「下関医師会沿革史」より)

明治5(1872)年
山口県により設置
校長 松本濤庵
県の開業医試験開始

明治6(1873)年
校長石井信一に交代

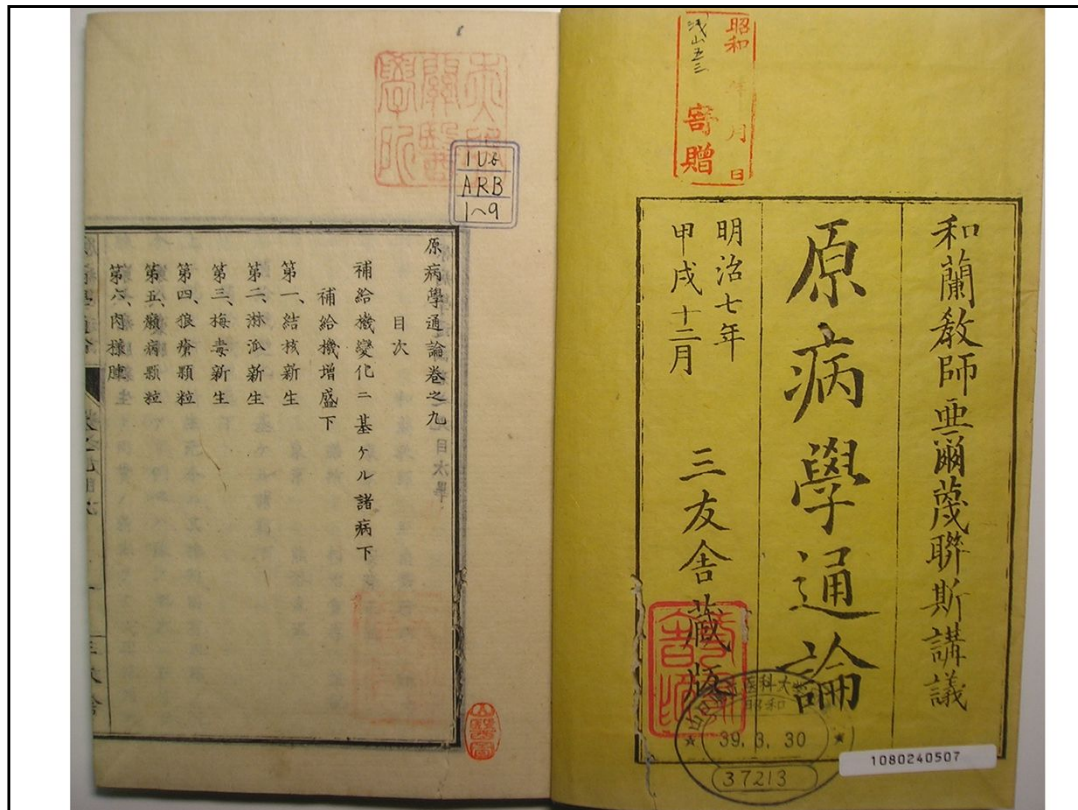
明治9(1876)年
山口県廃止を決める
三田尻華浦医学校へ
生徒移行

赤間関医学校は赤間関医学所とも呼ばれますが、明治5年に山口県が松本濤庵を校長として始めたものです。

同じ年に山口県は全国に先駆けて、西洋医学に基づく開業医試験を開始しました。そしてこの試験に合格した石井信一が、ここの校長となり教育を続けていくこととなります。

ところが明治9年になって山口県はこの学校を廃止しましたので、生徒は三田尻、現在の防府市にあった華浦医学校に引き継がれていきました。この写真で、後列中央が石井信一、前列右が浅山良輔です。浅山良輔は、幕末に萩、山口で医学を学び、赤間関医学校では、はじめは学生として、あとでは助読(たぶん助手と思われる)として医学教育を助けています。

[出典] 下関医師会沿革史(西尾弥三郎著). 下関医師会. 下関, 1930.

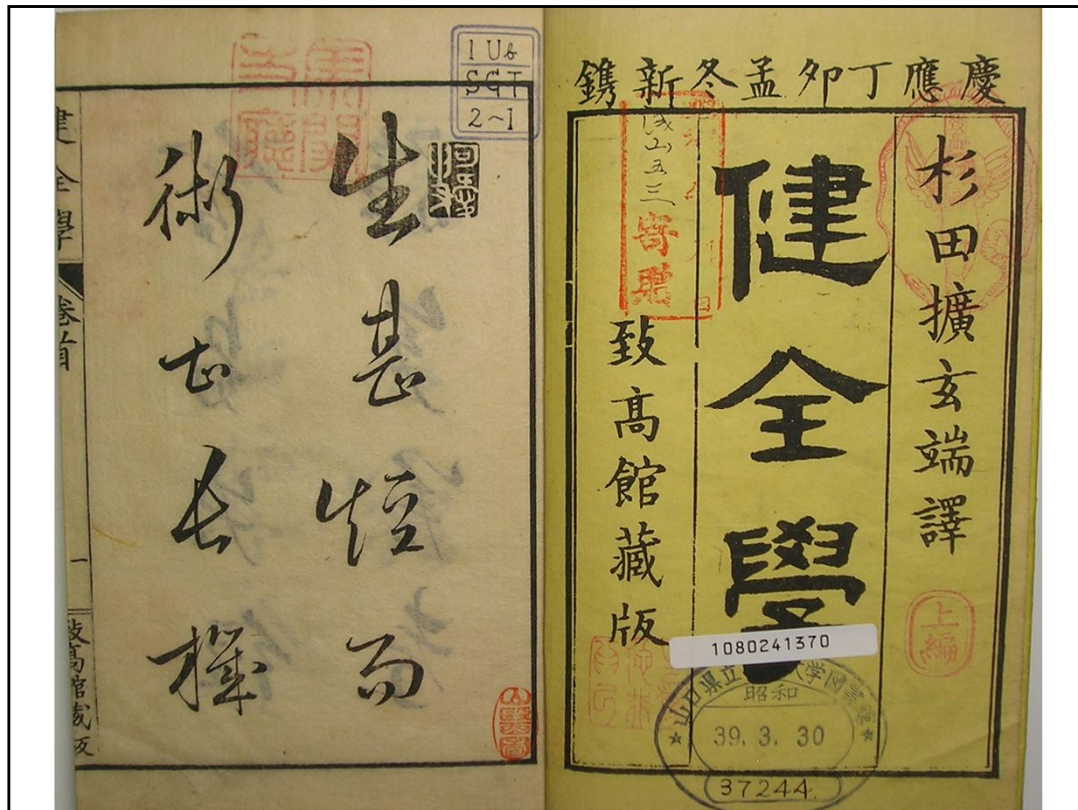


浅山家蔵書の一部をご紹介します。
「原病學通論」はオランダ人医師エルメレンスによる病理学の講義録ですが、ここに赤間関医学所の角印が見えます。



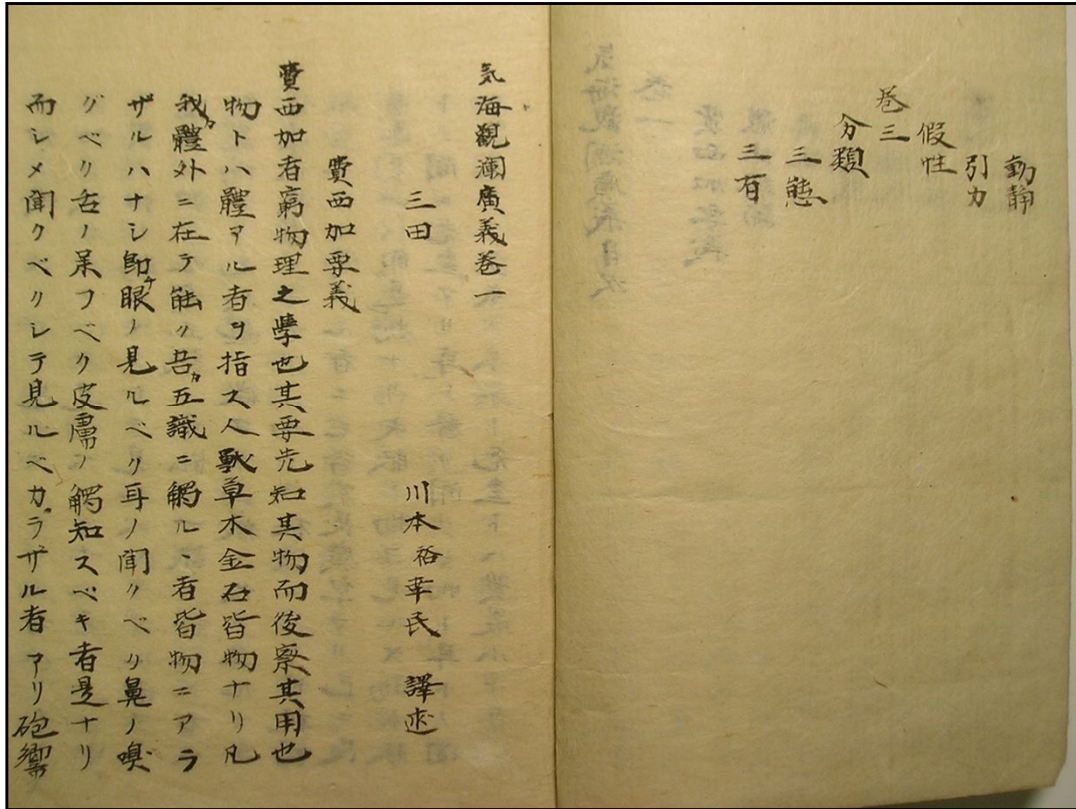
これは「講筵筆記」で、英国系の解剖学の教科書ですが、表紙に「十五番」と書かれています。

このような墨書は他の本にも見られます。教科書が何冊もあり、生徒に貸し出していたので、番号が書かれているのであろうと思われます。

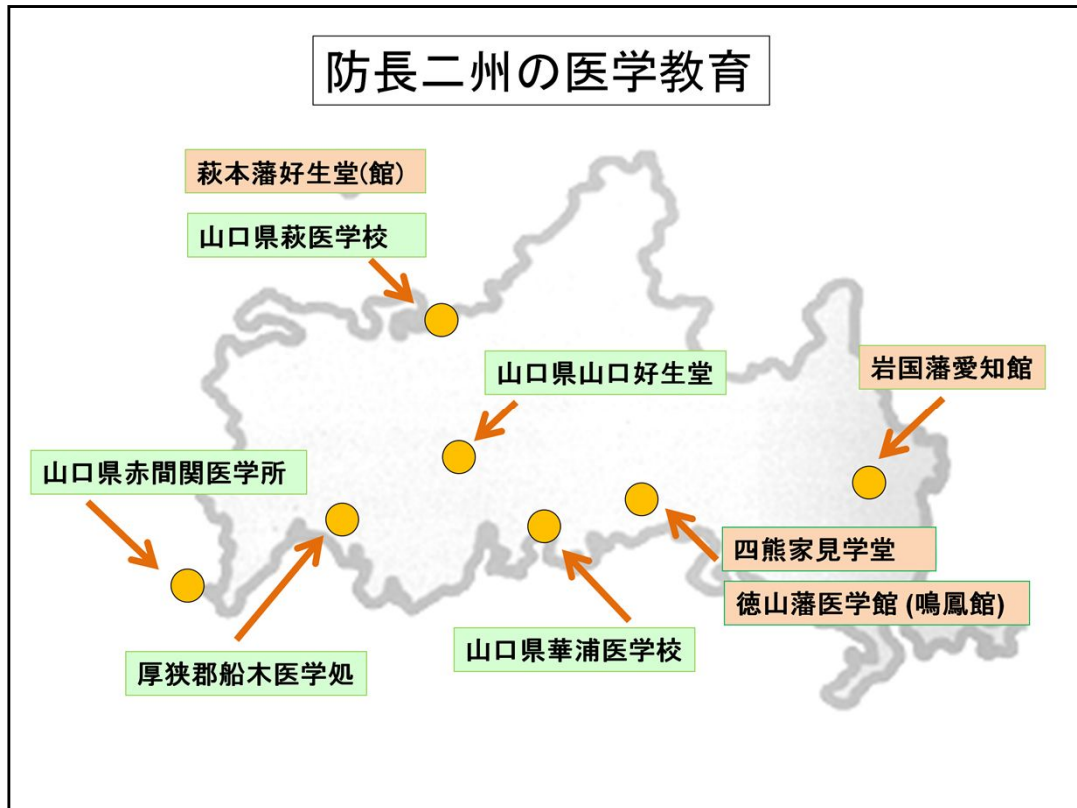


これは生理学、衛生学、栄養学に関するマーンの英文の本をコプスがオランダ語に訳し、さらに杉田玄端が和訳した「健全学」です。

ここには「馬関支庁」の角印が押されていて、赤間関医学校と県行政組織との深い関係が示唆されます。



これは川本幸民訳の物理学の教科書「氣海觀瀾廣義」ですが、この本が
 山口県開業医試験に取り上げられ、その内容の説明が求められたと、明
 治6年7月15日に受験した古谷道庵が日記に書き残しています。



最後のスライドは、防長二州における、江戸末期から明治初期にかけての医学教育機関を示しています。

四熊家の見学堂は萩宗藩の好生堂や徳山藩の医学館、岩国藩の愛知館よりも古いものです。

明治になってからできた山口県赤間関医学校、華浦医学校、山口好生堂、萩医学校、それから厚狭郡船木医学処などはいずれも短命に終わり、医師養成のための教育機関が復活するのは昭和19年の山口県立医学専門学校（現山口大学）の創設まで待たなければなりませんでした。[終り]